

給「國語」的提問信
—在日台籍作家溫又柔〈中間的孩子們〉論—

謝惠貞

文藻外語大學日本語文系專案助理教授

摘要

台灣文學自戰前便可觀測到由於多文化而產生在語言、文化上的混雜(Hybrid)的現象。而戰後伴隨全球化的離散活動中，也產生了許多台籍日語作家。探討其本質與跨越語言及文化的文學展演時，有必要同時理解台灣文學這個新的面向。本文將根基於以上的社會背景之考察，以溫又柔候選芥川獎之作〈中間的孩子們〉(集英社，2017.4)為探究對象，以認同理論及翻譯理論，並徵引溫又柔的散文集《我住在日語》(聯合文學，2017.3。日文版原題《台湾生まれ日本語育ち》，白水社，2015.12)，闡明溫又柔創作當中的論辯、自我翻譯的表現、眾聲喧嘩所形成的語言混雜等異化策略。

藉此本論文將分析，主角天原琴子如何迎向由於國籍、語言、血統所引起的動態的「包容和排除」。過程中她自覺到和集團的認同能有不同詮釋，即使搖擺於同化志向與異化志向之間，也致力於解構本質主義性認同的心路歷程。作為一個與時代脈動呼應的作家，溫又柔作品透過探索與他者相對的自立性，提示了現代多文化共生中的問題及對策。

關鍵字:國語、母語、自我認同、眾聲喧嘩(Heteroglossia)、
華語語系

**Inquiry to the national language:
From the perspective of Taiwanese lived in Japan,
Wen Yourou(溫又柔)’s “Children in the center”**

Xie, Hui-zhen

Contract Assistant Professor, Wenzao Ursuline University of Languages,
Taiwan

Abstract

We may see phenomenon of mixture of languages and cultures as a result of exposure of multi-culture in Taiwanese literature in prewar periods. Also, Many Taiwanese authors can create Japanese arts are born during the post-War due to globalism and the result of people’s dispersion all over the world. In order to discuss the essence of the literature as well as the expressions beyond language and context, we need to understand the new part of Taiwanese literature. In this essay, we take these factors and social background into account and make “Children in the center” written by Wen. It was nominated in final of Akutagawa award as the subject of research. We will use the method of interpretation and identity and refer to Wen’s “Taiwanese born raised in Japanese” and demystify Wen’s dialectic in creation, expression in self-translation and strategy in dissimulation which is the mixture of multi-languages called HETEROGLOSSIA.

The protagonist, Kotoko Amahara, goes against social inclusion and exclusion due to nationality, language, and ancestry. She realized how she is able to classify herself by theory, “ego identity and group identity”. Through her struggle between assimilation of intention and dissimulation of intention, she analyzed the essence of identity in the change in protagonist’s feeling and deconstructs her identity. The author, Wen, lives with the time offers problems and solutions through comparative independence.

Keyword: national language, mother language, identity,
HETEROGLOSSIA, Sinophone

「国語」への質問状
— 在日台湾人作家温又柔『真ん中の子どもたち』を中心に —

謝惠貞

文藻外語大学日本語文学科専案助理教授

要旨

台湾文学には戦前から、多文化接触による言語的・文化的混成の現象が見受けられる。また、戦後はグローバル化に伴う離散によって生まれた台湾人日本語作家も増え、その本質と言語・文化を越境する表現方法を議論するにあたっては、台湾文学の新たな一側面を理解する必要がある。小論では温又柔の『真ん中の子どもたち』（集英社、2017.7）を研究対象とし、同一性や翻訳理論を使用して、温又柔のエッセイ『台湾生まれ日本語育ち』（白水社、2015.12）を参照しつつ、温又柔の創作における弁証や、自己翻訳の表現、異種混淆言語による言語の混成などといった異質化（foreignization）戦略を解明する。

それによって、主人公天原琴子が、国籍・言語・血統をめぐって起きるダイナミックな「包摂と排除」に立ち向かい、集団的同一性とは別の解釈ができることに目覚める。また、受容化志向と異質化志向の間に揺れつつも、本質主義的同一性を脱構築していく作中人物の心境変化を分析した。こうした他者と相対的な自立性を見出すことによって、時代と共に生きる作家温又柔は、多文化共生といった現代の社会理念における問題点と解決策を提示している。

キーワード：国語、母語、同一性、異種混淆言語^{ヘテログロッシア}、華語語族

「国語」への質問状

—在日台湾人作家温又柔『真ん中の子どもたち』を中心に—

謝惠貞

文藻外語大学日本語文学科専案助理教授

1. はじめに

台湾文学には戦前から、多文化接触による言語的・文化的混成 (Hybrid) の現象が見受けられる。たとえば、植民、移民、越境等によって日本語という外国語を駆使し、文学的な越境を果たす作家が現れてきた。

戦後に関しては、グローバル化に伴う離散が生んだ外国籍の日本語作者が増加し、その本質と言語・文化を越境する表現とを議論するには、現代日本への理解が重要である。日本では、邱永漢、陳舜臣おんゆうじゅうに続き、すばる文学賞佳作入選者温又柔、直木賞受賞者東山彰良ひがしやまあきらなどの活躍が目立ち、彼らの描く日本語文学作品研究の重要性が高まっている。

以上の背景により、小論では温又柔に焦点を当て研究を行う。小論では温又柔の『真ん中の子どもたち』(集英社、2017. 7、以下は『真ん中』と略す。引用はページ数のみ () に入れて記す) を研究対象とし、同一性や翻訳理論を使用して、温の創作における同一性についての思索や、自己翻訳の表現、言葉の混成、異質化 (foreignization) 戦略¹を解明する。

2. 「国語」と同一性の抗拮

¹翻訳学者ヴェヌティは受容化 (domestication) と異質化 (foreignization) という二つの翻訳戦略を提出した。彼は、受容化における目標言語の支配的な姿勢を批判し、「目標言語で支配的な文化的価値によって排除されるような外国テキストを選択し、翻訳手法を開発する」と異質化戦略を推奨した。ジェレミー・マンデイ著、鳥飼玖美子監訳 (2009) 『翻訳学入門』、東京：みすず書房、233 頁。

2.1 「国語」と「母語」の狭間

温又柔はかつて筆者による取材に対して、日本語で生きているが日本人ではない、という「永遠のズレ」²を、日本語で表現したいと述べている。『来福の家』（集英社、2011.1）に収録された「好去好来歌」は、温又柔が在日韓国人作家李良枝『由熙』（講談社、1989.2）での二つの言語と国に挟まれている苦悩の「続きを書く覚悟で挑んだ」とも述べている。日、中、台の言語が飛び交うテキストを通して、作家本人の言語体験が主人公楊縁珠に投影され、日本社会から拒絶される疎外感と「国籍＝言語＝血統」を担保にした「同一性（identity）」に対する不信感を示唆している。中国語で話す時に感じる「日本人にしては上手、台湾人にしては下手」³というズレの感覚が、2016年に第64回日本エッセイストクラブ賞を受賞したエッセイ集『台湾生まれ日本語育ち』（白水社、2015.12。以下は『台日』と略す。引用する際には、ページ数を〔 〕に入れて記す）と『真ん中』でも展開された。

『真ん中』では、日本人の父と台湾人の母を持つ天原琴子（愛称ミーミー）が、上海の中国語の専門学校・漢語学院で出会った、それぞれの「ズレ」を持つ友人との連帯感と、国籍、言語、血統の「永遠のズレ」による悲喜劇が繰り広げられている。琴子の生い立ちとは対照的に、「双子の姉妹（8頁）」のような呉嘉玲（愛称玲玲）は、台湾人の父と日本人の母を持ち、国籍は台湾である。また、元台湾人だった祖父の代から日本に帰化している龍舜哉は、中華風の苗字を持ちながらも、日本国籍の所有者で、関西弁が母語だという。教え込まれている一枚岩の言語観や同一性を持つ日本人同級生や中国人教師との齟齬を三人で分かち合い、自分の出自との向き合い方を共に模索する。

彼らが最初にぶつかった問題とはすなわち、「国語」とは何かと

²蔡雨杉（謝惠貞）（2010）「雙重錯位的永恆命題——專訪 SUBARU 文學賞得主温又柔」『聯合文學』307号、台北：聯合文學、75頁。

³温又柔（2015）『台湾生まれ日本語育ち』、東京：白水社、126頁。

いう問題である。そもそも、「国語」は「近代国民国家において国民の創出および統合のために用いられる制度の一つ」⁴である。経済移民をする際には、その「国語」による国民統合教育の圏内へ移動することになる。そもそも作者の温又柔は、どのように「国語」を考えていたのだろうか。彼女は「日本の小学校に通うわたしは、「国語」の時間に日本語を教わった〔87頁〕」。そして日本語に「確かに愛着を抱いている〔88頁〕」と告白している。

同時に、祖父母と両親の世代の「国語」を考えることによって、国語と親子三代、歴史と心情の重なり、時間と記憶のベクトルが加わり、鏡像的に台湾の「国語」問題への関心を露わにしている。

台湾で暮らす人々が、ときの政府の方針一つで、「大日本帝国」の「臣民」にも「中華民国」の「国民」にもさせられる……両親の、祖父母の辿った道を考えるとき、わたしはいつも問いに立ち返る。「国」って何？ 「国語」って何？ わたしの「国語」は日本語だった。しかしわたしは日本の「国民」だったことはない。〔169 - 170頁〕

ここでは日・中・台の歴史的な事情と共に、「国語」が重層的に考え直されている。さらには、鏡像の反射の射程を対照的、擬似的な相手へと広げていく。

『台日』で温は、日本統治期の日本語作家呂赫若にとっての「帝国が強いる「国語」と、「植民地」の「母語」〔188頁〕」の非対称性に注目した。「執筆言語である「国語」と、生来の感覚を決定づける「母語」との間に否応なく生じる亀裂があったからこそ、「玉蘭花」の作者は、書き言葉としての日本語の不自由さをはじめから明確に意識することができた〔195頁〕」。戦後になっても、台湾では同化政策により、「もともと中国語は、多くの台湾人にとって、「国語」

⁴安田敏朗（2003）『脱「日本語」への視座』東京：三元社、22頁。

という衣を纏った「外国語」だった〔84頁〕というように、「外国語」が「母語」として押し付けられている。

こうして温は、サイドが提唱する「対位法的読解 (contrapuntal reading)」⁵を行うことによって、自らの三代の記憶を遡り、その歴史と国家制度と照らし合わせて検証を続けている。歴史と記憶についての祖父母や両親との比較、呂赫若の「国語」と「母語」の間での揺れ動きへの注目をまとめた『台日』、そしてその関心を『真ん中』で小説化したという温のプロセスが伺える。温又柔が、「母語」についてどのように思考したのかということは、ある程度作中に投影されると思われるので、まずそれを分析しておきたい。

言語社会学の代表的な学者、Skutnabb-Kangas と Phillipson によると、母語は次の4つに定義することができる。①第1言語、②最も精通している言語、③最も頻繁に使う言語、④最も共感する言語⁶。この定義を受けて、温又柔の「母語」をめぐる下記の『台日』における2つ論述を見てみよう。

日本語と中国語と台湾語。三つとも、それぞれ別々の意味合いにおいて、まぎれもなくわたしの「母語」なのです。〔233頁〕

母は日本語のほかに中国語や台湾語を奔放に繋ぎあわせる。

……—ティアー・リン・レ・講話、キリクァラキリクァラ、ママ、食べれないお菓子。……こうした母によるちょっぴりトンチンカンなニホンゴを、わたしと妹は「ママ語」と呼んでいる。〔32-35頁。下線は筆者による。以下同様〕

⁵サイドはテキストに「どのような問題がからんでくるかを理解しながら読むことである」「対位法的読解」を薦め、「テキストを読むときに、視野をひろげ、テキストから強制的に排除されているものをふくむようにすればいいのである」と説明を加えた。エドワード・W・サイド著、大橋洋一訳（1998）『文化と帝国主義 1』東京：みすず書房、137-138頁。

⁶Skutnabb-Kangas, T. and Phillipson, R., “‘Mother Tongue’: the Theoretical and Sociopolitical Construction of a Concept” in Amon, U. Ed., *Status and Function of Language and Language Varieties*, New York: Walter de Gruyter, 1989, pp. 450-477.

airiti

幼少期の温又柔は、母親が編成した「ママ語」なる混成語を受け継いだことが分かる。ほかに、国語に隠れている国家統制と、共感する度合という感情的な要素が両方働き、さらに「国語」と「母語」を合体させ、「母国語」を使用することもしばしば見受けられる。

『台日』における「母国語」には二通りのニュアンスが含まれている。一つは、「母」の「国語」、もう一つは「(養)母国」の「語」つまり「(養)母国の言葉」である。前者は、温又柔の母が台湾で習った、国民国家を統合するための「国語」、つまり北京語に近い「台湾国語」になる。そして、後者は、「台湾国語」、「台湾語」、その二つを混ぜた「ママ語」以外に、養母国として見なしてきた日本の言葉、「日本語」も入れている。

自分が日本人ではないと意識するとき、……日本語を、自分の「母国語」と言い切れることができない。逆に、……日本語こそがわたしの「母国語」なのだ、とあえて言いたくなるときもある。〔182頁〕

両親の「母国語」は、ほんとうに中国語なのだろうか？ 子どもの頃、鞭で打たれるのを恐れながら必死に身につけたコトバを、ひとは母国語と思えるのだろうか。愛着を抱けるのだろうか。〔85頁〕

李良枝が描く母語と母国語が一致していない人物たちの「葛藤」が、まるきりの他人事と思えず、肌身に迫った。〔79頁〕

上記の「母国語」についての言説では、愛着や憎悪など情念で母語の定義を拡充したわけである。

温は、「日本語は自分にとっては継母語」というリービ英雄の言葉を借りて、日本語は「養母語」、中国語は「生母語」、台湾語が「乳

母語」とかたどった⁷。これらからは、「国語」という枠で言葉を考える悩ましきから、共感を重んじる「母語」という概念で言語を捉え直す思考の転換が読み取れる。温又柔はかつて台湾の記者から「你觉得自己的归属在？(ご自分の居場所はどこだと感じますか)」⁸と聞かれ、「我住在日语(わたしは日本語に住んでいます)」と答えた。また、「それを「母国語」と呼ぼうと呼ぶまいと、わたしが自分の思考の杖として最も頼りにしている言語は、日本語なのだ」⁹と告白した。

そもそも母語か母国語かの使い方の揺れは、いずれも家族的・国籍的といった集団的同一性との関連から論じられるニュアンスが強い。しかし、「我住在日语」というような個人で解釈できる自我同一性に依拠する「同類」¹⁰思想に基づけば、母国は一つだけではないし、国語は母語と一致するとは限らないし、母国語も一つに限らないという温の結論が推察できよう。

この自身の経歴を取り込んだ『真ん中』では、「日本人・中国人・台湾人とは何か」といった問題に加え、「日本語・中国語とは何か」、「日本語・中国語は誰のものか」といった「国語」への質問状も綴られている。

2.2 同一性の構築と過剰同一性

同一性(アイデンティティ)という概念をはじめて提唱した社会心理学者エリクソンは、「自我同一性(ego identity)」と「集団的同一性(group identity)」を区別している¹¹。「自我同一性」とは、「他

⁷温又柔(2013)「日本語圏の「新しい」台湾人として書く」、郭南燕編『バイリンガルな日本語文学——多言語多文化のあいだ』東京：三元社、213頁。

⁸温又柔前掲書、187頁。

⁹温又柔前掲書、188頁。

¹⁰田中克彦(1999)『クレオール語と日本語』、東京：岩波書店、177頁)では、日本語人共同体について、次のように述べている。「アイデンティティとはあるものがあるものと、ある人がある人と同類であることを示すラテン語 idem から出たことばです」。

¹¹エリック・H・エリクソン著、小此木啓五訳(1990)『自我同一性——アイデンティティとライフスタイル』東京：誠信書房、11頁。

者に対して自己が持つ意味の同一と連続性を保障する働き」¹²であり、「集団的同一性」とは、「社会および集団が個人に伝達する経験を組織づけるやり方」¹³だと定義されている。もちろん、現実的には、完全に単一で、本質主義的な同一性を持つ人間は存在しないが、国家統制などはそうした集団的同一性を存在しているとして、想像上で構築されたその想像に苦しめられている人もいることは確かである。

天原琴子のような「真ん中の子ども」たちは、国境を移動する際に、一気にこうした想像上の自我同一性と集団的同一性がぶつかり合い、ショックを受ける。「じょうずだねって褒められたから、我的妈妈是台湾的ってうちあげたら、それにしてはへただねって。褒められた直後に貶されるなんて全然想像できなかつたから、動揺しちゃった（60-61頁）」。

このように、琴子が他者と対話を繰り返す度に、同一性が変動していることが窺える。上野千鶴子はラカンの「主体化とは他者となる」といった言葉を引き、他者の言語で語ることによって、意味が伝わり、またこうした実践の中から、「同一性が構築される」¹⁴と述べている。しかし、そうした過程においては、他者の過剰な期待に出会う場面も多い。その例を見ていこう。

——まるで日本人だなあ。浴衣姿の私をそう褒めた父方の祖父が生きていたら、上海製の旗袍をまとった私を見て何と言うだろうか？（68頁）

「私のお父さんは日本人です、しかし私のお母さんは台湾のひとです」と打ち明けると、二胡を引く中国人からは、「哎呀、那

¹²エリック・H・エリクソン前掲書、10頁。

¹³エリック・H・エリクソン前掲書、7-8頁。

¹⁴上野千鶴子（2005）「序章 脱アイデンティティの理論」、上野千鶴子編『脱アイデンティティ』東京：勁草書房、28頁。

你不該說自己是日本人吧! (筆者訳: あら、じゃ、自分のこと日本人って言わなくてもいいんじゃない? 89-90 頁)

こうした他者からの過剰な期待に応えようとするなら、「過剰同一性」の危機に陥る恐れが伴う。エリクソンは、過剰に自我的同一性を集団的同一性と一致する状態を、「過剰同一性」¹⁵と名づけて批判している。想像上の同一性が安定した同一性の持ち主は共に、民族や言語の境界線の両側に安住しきれない者をどれかに分類しようとし、その「不純さ」を抹消しようとする動きが伺える。こうした同一性の強迫、またはどれかに統合すべきだという「統合仮説」¹⁶と対面する時、琴子はそれに釣られて、「線が、見えればいいのに (61 頁)」と自他の間に線引きしようとし、自らの声を「雑音」¹⁷扱いするようになり、傷つく。ここに表われた矛盾とは、他者の基準で自分を定義することは、「不純さ」と線引きしようとする他者の二項対立的思考の落とし穴に陥る恐れがあるという点である。

3. 脱同一性¹⁸——造語、自己翻訳、^{ヘテログロッシア}異種混淆言語の力

3.1 傷付けられた同一性から「不純さ」への肯定

これまでに述べたような、線引きしようとして線引きしきれない情念は、相反する働きをしている。たとえば、「私にとっての、正しい中国語は何なのか。普通話を完全な外国語として学んでいる日本

¹⁵エリク・H・エリクソン前掲書、156 頁。

¹⁶上野千鶴子前掲論文 (35-36 頁) では、「アイデンティティの理論の革新は、アイデンティティ強迫や統合仮説と対抗してきたが、それらの努力は「宿命」としてこの強いられた同一性から逃れたい、または逃れる必要があると考える、(少数派の) 人々によってこそ担われた」と論じている。

¹⁷温又柔は『台日』(116 頁) で、自ら線引きするエピソードを語っている。「わたしは、「国語」としての日本語にとっても従順で、そこかられ零れ落ちるものを、雑音とみなしていた」と述べている。

¹⁸この概念は上野千鶴子前掲書 (2005) の『脱アイデンティティ』より援用している。

人とはちがう。中国の人に言わせれば南方訛りの國語を台湾人のように堂々と喋るにはレベルが全然低い(113-114頁)」というように、外部に貼られた「不純さ」のレッテルに対して、感情が傷付けられている。

中国人による「南方訛り」批判の背景には、台湾が体験した二つの「国語」同化運動と同じイデオロギーが働いている。陳培豊によれば、「2つの国語「同化」政策は基本的にどちらも国語をエスニックグループの象徴と見なし、言語の「同化」力を通して、台湾人を自分たちのナショナルアイデンティティの範疇に収めようとしたからである」¹⁹という。

また、龍舜哉の訛りを嘲った日本の標準語の分らない大阪の子供たちにとっても、自国の標準語と外国の中国語はいずれも外の言葉である。そもそも、「言語」と「方言」の違いは言語学的なものではなく、政治的なものによって決められるもの²⁰である。言語間の権力格差は、同一国においても起きている。それと対照的に描かれた、日本語学科の中国人学生は、より大きなカテゴリーの国民国家に帰属意識をもっているからこそ、方言訛りの自分の「不純さ」から目を逸らす。たとえば、テキストでは、「上海語」が「普通话」に勝り、「全体(標準語)」が「部分(方言)」を回収しないまま、並列する現場も記録している。

一方で、琴子たち三人は、血統の「不純さ」のみならず、言葉による親近感と疎外感の両方を味わいながらも、捉え方が異なっている。

琴子は、「わたしにとって日本語は、“母”の言葉ではない。むしろ。“父”の言葉です。だからわたしは日本語を“父語”と呼びたい

¹⁹ 陳培豊著、中川仁訳(2005)「台湾における2つの国語「同化」政策」、原聖編『脱帝国と多言語化社会のゆくえ——アジア・アフリカの言語問題を考える』東京：三元社、63頁。

²⁰ ドーア根理子(2008)「第3章「通じること」の必要性について——標準化のイデオロギー再考」、佐藤慎司、ドーア根理子編『文化、ことば、教育——日本語／日本の教育の「標準」を超えて』東京：明石書店、65-66頁。

airiti

(103 頁)」という発言を「変な表現」だと陳先生に批判され、この悶々とした体験からうまく自分を解放できない。

一方、呉嘉玲は疎外感をもっとも感情的に爆発させ、他者との距離を最後まで堅持する。「——你的父親是中國人。その中国語は、こんなにも玲玲を動揺させる。そう、かつてぶつけられた「こいつのお父さんガイジンじゃん」という日本語と同じぐらいに(100 頁)」。

龍舜哉は、三人の中でもっとも彼らのズレ感覚を適切な言葉で把握し、自らのズレ感覚とバランス保っている。三人の中で、龍舜哉が、天原琴子と呉嘉玲の同一性想像に一石を投じる存在である。日本に帰化した龍舜哉の「両親のどちらも元々は中国人なら、舜哉自身はナニジンなのだろう？(38 頁)」という天原琴子の質問に対して、「おれをナニジンだと思う(38 頁)」と返し、その認定の恣意性を天原に突きつけた。「おれたちみたいなのは、どっちにもなれるんや(42 頁)」と龍舜哉は結ぶ。呉嘉玲は龍舜哉の言説をとうとう受け入れなかったが、啓発された琴子は同一性の捉え方に大きな変貌を見せる。

言い換えれば、同一性とは都合により、「まるで、わたしたちは日本人ではない(42 頁)」ような口調で、「日本人ってほんといつるむの好きだよ(42 頁)」とも解釈できるものだと端的に指摘した。これは、琴子はその恣意性に気づいた場面ともなる。その恣意性は、安定した同一性の持ち主たちが、琴子ら「真ん中の子どもたち」の同一性の揺れへの想像力が足りないことに由来する。

他者の定義による集団的同一性は、恣意的で、往々にして、排除の論理によって行われるので、「真ん中の子どもたち」は常にマイノリティ化されてしまう。琴子に、マジョリティの二項対立的な見解の矛盾に附合する危険を回避させるため、龍舜哉は天原琴子の「線が、見ればいいのに」という議論に対して、本質主義に還元するのを遮って、「線なんてない。ミーミーがそう思えば、ミーミーは日本人にも台湾人にもなれるよ。(64 頁)」と肯定的に捉え直すきっかけを与えた。

airiti

「假日本人は、舜哉だけにしてよ。」という呉嘉玲からのツッコミに対して龍舜哉は、「インチキ日本人、最高です。ほんものの日本人なんか、日本じゅうにいっぱいいる。偽のほうが貴重。おれたちは貴重なんですよ (118 頁)」という。さらに舜哉は、「根なし草？ はは。どこにでも根がおろせるんだよ (158 頁)」と軽蔑の言葉を反転させて見せる。

龍舜哉から啓発を受けた琴子は、少しずつ、自分の感情を適切に間を保ち言語化することができるようになっていく。例えば、次の3か所がそうである。

——あいのこでも、なかなか似合うもんだなあ。そのことばは、私たちのような子どもを侮蔑するためにある。でも、そのことがどうして私たちを貶めることになる？ (120 頁)

「アイノコって響き、愛の子どもみたいだあって」 (120 頁)

父と母の半分ずつが私の全部なの。(127 頁)

この小説の面白さは、コトバとしての日本語に残されている、カタカタ、漢字、振仮名など歴史上外来文化に開かれた多様性のルートを最大限に活用させ、「国語」としての日本語の排他性²¹を批判するところにある。

琴子は、2-1 で論じた「国語」と「母（国）語」の間の狭間に注目し、国籍、血統の「不純さ」を肯定する意志の芽生えとともに、同一性に悩まされる過程で、「不純さ」の肯定を通して、本質主義的

²¹『真ん中の子どもたち』は、第157回芥川賞にノミネートされ、選考委員の宮本輝に「日本人の読み手にとっては対岸の火事であって、同調しにくい」と評されている。この評を見て、その立場がまさに「国語」としての日本語の階層構造を再現しており、また国際化が進んでいる日本にはすでに大勢の日本籍の「真ん中の子どもたち」が存在していることから目を逸らしていると思えざるを得ない。

3.2 造語、自己翻訳、^{ヘテログロッシア}異種混淆言語の力

では、日本語に残された多様性のルートはいかに、「国語」の排他性への批判及び、脱同一性の方法として表現されたかを考えてみたい。

笹沼俊暁が評したように、温が啓発を受けた、その恩師リービ英雄は「多様な人種や民族を受け容れうる、普遍的な言語表現としての日本語」²²を実践し、温もまた二人の対談において、日本語の可能性で「偏狭なナショナリズム」²³に対抗するリービの姿勢が伴うと認識している。

彼ら「真ん中の子どもたち」の言語使用の特徴の一つとして「自己翻訳 (self-translation)」²⁴が考えられる。琴子たちは、育った家庭内でも常に翻訳を余儀なくされており、その達成度は日々磨かれ、追及されているとも言える。

また、自己翻訳で翻訳しきれないものに出会うと異質化の戦略が働き、「造語」が生まれるわけである。たとえば、龍舜哉は自分の母語は「西の日本語」を意味する中国語の造語「西日語 (16 頁)」だと自己紹介する。自らの造語による自己定義である。

さらに、国境を越えた移動によって、学校教育を介して単一化を目指す「国語」習得の推進に反し、「普通」の家庭にとっては「認知不可能」な^{ヘテログロッシア}「異種混淆言語」に当たり前のように接している。

——べんきょう、大事。でも不要太累！ ベーサイ、ポー・チ

²²笹沼俊暁 (2011) 「リービ英雄における台湾」「リービ英雄における台湾」『文学研究論集』29号、つくば：筑波大学比較・理論文学会、5頁。

²³温又柔、リービ英雄 (2016) 「対談『模範郷』を読む：東アジアの時間と「私」」、『世界』887号、231頁。

²⁴秋草俊一郎 (2012) 「自己翻訳者の不可視性——その多様な問題」『通訳翻訳研究』12号、東京：日本通訳翻訳学会、155-174頁。

airiti

ヤア・ミーキャ。妳一定アイ・クンパー！（勉強も大事だけど、ちゃんとおなかいっぱい食べて、たっぷり眠るのよ）中国語と台湾語をちゃんぽんにしながら、母は私に言い聞かせる。（12頁）

温又柔、または天原琴子が小さい頃「ママ語」と呼んでいた「異種混淆言語」は、一種のクレオール語²⁵で、3歳までの温又柔はそれを母語としていた。こうした異種混淆言語は自己翻訳の循環を伴っているのだ。

こうしたポリフォニー（polyphony）に言語の生成する場をレポートし、読者はその「デコボコ」を理解するために、言語間の差異に注目せざるを得ない。酒井直樹はかつて「言語をどのようにして数えるのか——翻訳という実践系」において、翻訳行為と差異との関連性に注目し、以下のように論じている。

翻訳者の労働とは、……話し手と聞き手の間の非連続を連続にし、認知不可能な差異を認知可能な差異に変換させる仕事をめざす。この意味で、……翻訳とは表象できないような差異を表象可能な差異にかえる行為なのである²⁶。

さらに踏み込んで言えば、彼らは、たえず「認知不可能な差異を認知可能な差異に変換させる仕事」に携わっていることが分かる。また、外国にルーツを持つ者の言語的現実を、滑らかな日本語で受容化的に日本語に溶け込ませず、読解不可能な部分も忠実に表現する「日本語」小説としても可視化されるのだ。つまり、その異質化

²⁵ 田中克彦はクレオール語を「全く文法構造のちがう言語を母語とする話し手どうしが出会って、そこで話が通じるように、……最終的に生れた新しい言語」と定義した。田中克彦（1999）前掲書、13頁。

²⁶ 酒井直樹（2008）「言語をどのようにして数えるのか——翻訳という実践系」、佐藤慎司・ドーア根理子編『文化、ことば、教育——日本語／日本の教育の「標準」を超えて』、東京：明石書店、55頁。

戦略は成功しているといえる。

そしてこの「異種混淆言語」が、天原琴子の中国語の学習に「不純さ」という影響を及ぼし、龍舜哉から「ナニジンであろうが、ミーミーなんだから、ミーミーの中国語を堂々と喋ればいい（115頁）」という肯定的な言葉を引き出すことになる。ここで注目すべきなのは、龍舜哉の「中国語」は「華語」の意味以外に、日本語、台湾語、中国語をごちゃ混ぜにした「異種混淆言語」のニュアンスも含まれている。

前節で論じた言語による疎外感の正体は、自我同一性と集団的同一性の統合仮説に囚われる自己の存在に由来している。一方、それに囚われない龍舜哉は「日本人ではないのに、日本語が母国語（116頁）」、「言葉と個人の関係は、もっと自由なはずなんだよ（116頁）」といい、「不純さ」への肯定にポイントを置き、新たな解釈の産出によって、解釈の反転を行っている。

『真ん中』では、龍舜哉の言葉を借りて、彼らの「不純」な言語を「標準語」の序列から解放し、三人の「ヘテロトピア (Heterotopia)」²⁷を作り上げたのである。それは、またグローバル化の拡大により、もはや「真ん中 (the Center)」的な存在にもなりつつある²⁸。

ミーミーが自分のチューゴクゴーを中国語^{zhōng guó yǔ}って言うの、すっごくいいなと思うんや。普通話とも國語^{guó yǔ}って言っているチューゴクゴーの中に、ミーミーが赤ちゃんのときに聞いてた國語や、いま学校で教わってる普通話を皆、放り込めてしまう感じがさ。センセイは×つけてるけど、おれなら花丸あげるね」（135頁）

²⁷ 2013年には高山明演出の演劇プロジェクト「東京ヘテロトピア」に一連の短編を温又柔は寄せていることに因んで、この言葉を借用する。

²⁸ 2017年8月7日東京・虎ノ門にある台湾文化センターでの温又柔の講演によれば、「真ん中」とは、国籍・民族・言語の間の意味だけでなく、将来社会の中堅・主流 (the Center) になる意味も込められているという。

このように、ヘゲモニーによる標準語と他の言語との階層的な序列とは異なる、非ヒエラルキー的な異種混淆言語（Heteroglossia）^{ヘテログロッシア}に活路を見出している。小説の冒頭には、トリン・T・ミンハの言葉「他者への深い尊敬の念は自尊心から始まる」を引き、小説のモチーフを説明していると推察できる。それはつまり、自分による同一性の解釈権を尊重することによって、他者によって貼られた「不純」というレッテル（集団的同一性）から初めて、憎悪などの念を帯びずに、「敬して遠ざく」（『論語』）心境にたどり着けるのだろう。

4. 『真ん中の子どもたち』の連帯と逆襲——「華語」を意識しつつ 4.1 「中国語」の5つの意味と連帯感

日本語人としての同一性を見出した琴子は、異種混淆言語^{ヘテログロッシア}の一部を構成する「中国語」について「対位的読解」を行っている。

普通话ではないけれど、国語もまた中国語なのだ。……上海語を話す上海人たちにとって普通话が一種の外国語のような母国語であるのなら、國語を話す台湾人にとっての普通话はある意味では母国語のような外国語になるってこと？（102 頁）

「普通话ではないけれど、国語もまた中国語なのだ」という一文から見れば、温が使っている「中国語」とは、「華語」の概念に近いものであろう。

琴子の作文のタイトル「我的中国語」の「中国語」が陳先生に「普通话」に訂正された際に、「为了提高你的母语（あなたの母語を向上させるために）と老師は言ってくれるのだけれど、それはほんとうに私の母語なのだろうか？……いつかの自分の無知が情けない中国語は中国語だと思っていた（133 頁）」と、琴子は反省している。下線部は、琴子が「普通话」と「台湾国語」とはまったく同様な言語だと誤認していたことを指している。普通话は天原琴子にとって「よ

そよそし(105頁)」くて、とても母語とは言にくい。その一方で、「中文」と言おうと「漢語」と言おうと、そのナカミは中国語である。そして、それが母たちの「国語」(134頁)」といい、「普通話」、「台湾国語」、「中文」、「漢語」を総称する語彙として「中国語(華語)」を使用することによって、混乱しているように見える琴子の認識を統合することができたのである。注意すべきなのは、ここでの「中国語(華語)」は総称としての意味であって、使用者の最も多い「普通話」を中心とした概念ではない。むしろ、それぞれを平準化にするための概念である。このように作中の「中国語(華語)」の概念を理解すれば、その試みの持つ深みに気付くはずである。

華語語族による文学や芸術表現研究の第一人者史書美は『視覚與認同：跨太平洋華語語系表述・呈現』で、華語語族は、絶えず変化し、開放するグループだと述べ、華語語族を「中国以外で使われている異なる漢語言語(Sinitic languages)の各地域も含む」²⁹と定義し、華語語族の使用者は「国籍上、中国人とは限らない」³⁰し、それを創作言語として使用する時の能動性について、論述している。

差異をもって固定を打破し、特殊性を以って全体性を打破する。そこで、華語語族が進んで使う表現モデルとしては、間テクスト性的である：諷刺、アイロニー、パロディ、継ぎ合わせなど。しかし、間テクスト性は単なる書き換えや新しい発明ではなく、新たなアイデンティティと文化を築き上げる方法である³¹。

さらに、華語語族は中国の「普通話」という「主流言語だけを物

²⁹原文は、「包含了在中國之外使用各種不同漢語語言(Sinitic languages)的各個區域」。史書美(2013)『視覚與認同：跨太平洋華語語系表述・呈現』台北：聯經、53頁。中国語の文献の日本語訳は筆者による。以下同様。

³⁰原文は、「国籍上，不限於中國人」。史書美前掲書、269頁。

³¹原文は、「以差異打破固定、以特殊性打破整體性。因此，華語語系樂用的表述模式是互文的：諷刺、反諷、仿諷、拼湊等等。然而，互文性並不只是重寫或重新發明，而是建構新的認同與文化的方法」。史書美前掲書、64頁。

差しにする必要はない。華語語族は表現することによって自立権を獲得するのだ」³²とその自立性を唱える。

琴子が言葉たちへの質問状を自問自答しながら、言葉を自分の中で、序列を平準化することによって、上記のように中国語の内容の拡大だけによるのではなく、時間軸を広げて、また空間軸では東アジアにも目を向ける。琴子は、「在日」という境遇へ収束せずに、民族と言語を相い混ぜる子どもたちへと視線を広げた。

『真ん中』においては、まず、呉嘉玲と天原琴子が二人とも「アイノコ（120頁）」（混血児）で、呉は「自分と似た境遇だから安心して一緒にいられる（36頁）」と天原に伝え、次に「中華風の姓名を持ちながら日本から来たという龍舜哉に、自分と同じ境遇を玲玲は予感し（15頁）」、三人のマイノリティとしての連帯感が結ばれる。

卒業後、龍舜哉はマレーシア華僑の友人の伯父の会社に勤め、ハノイ、ベトナムなどアジア各地を飛び回り、琴子は台湾で自分の境遇を彷彿させる台湾出身者と外国籍所持者の間に生まれた子どもたち「新台湾之子（152頁）」たちに、中国語を教えるようになる。「こうした子どもたちの「母語」は複数の言語から成っている（154頁）」と思い、「愛の子（159頁）」たちに臨む。まさに、中国語習得過程で出会った抑圧構造の負の連鎖を解消するための実践を見せている。

また、呉嘉玲がその後の恋人、「北京に中国画を学びに来ていたPatrickの母方の祖父母も中国人だった（156頁）」ことを描くことで、華語語族の者からさらに華語を話すとは限らない華人³³にまで連帯感を広げている。三人とも、自らの経験を「より時間幅の大きな物語」³⁴に整合するようになった。

³²原文は、「不必只以主流語言為衡量標準。華語語系乃是透過表述而獲得自主權」。史書美前掲書、57頁。

³³ 游仲勳によれば、華僑は、海外に出稼ぎの中国生まれの一世で中国籍の者を指し、華人は居留国生まれの二世、三世などで、現地の言葉を使い、現地国籍を持つ者を指す。游仲勳(1995)『華僑・華人經濟——日本・アジアにどんな影響を及ぼすか』東京：ダイヤモンド社、7頁。

³⁴ 浅野智彦(2005)は「物語アイデンティティを越えて？」(上野千鶴子編『脱

温又柔はこのように、日本語への質問状、または中国語への質問状に置き換えつつ、いったい誰が私をマイノリティにしたかを問い続ける。その問いは、田中克彦の述べたように、必然的に「言語共同体」³⁵への思索につながる。その思索は、『真ん中』においては、日本語族の成立の可能性を、華語語族という鏡像によって、逆照明していてもいるといえよう³⁶。

『真ん中』は、李良枝『由熙』における「あ」か「아」で始まる「ことばの杖」の葛藤を継承しながらも、韓国語と向き合うことを避け、「ウリナラ（わが祖国）」を見つけなかった『由熙』を越えて、繋ぎ合わせの「華語」をも杖として見なし、母国は自ら定義するものだという活路も提示している。

4.2 それぞれの正しさを認める

華語語族との連帯感は、その一方、自分がナニジンかという思索にも変化をもたらした。テキストの中盤で琴子は、肯定文、否定文を組み合わせ、つまり二項対立的な「言葉」で「自分はいったい何か」を言い表そうとしている。

ノートに「我的二分之一不是日本人」と試しに書いてる。私の半分は日本人ではない。他の言い方はできないだろうか？ と思う。それで「我是不完全的日本人」とも書いてみる。私は完全な日本人ではない。ふと、「假日本人^{jǐ à rì běn rén}」ということばが浮かぶ。——我们都是假日本人（ぼくら偽日本人なんだ）。（90 頁）

この自問自答は、同一性強迫や統合仮説に基づいての発想で、自

アイデンティティ』東京：勁草書房、87 頁）で、自己物語論を説明し、「自己物語がカバーする時間的範囲の長短によって」、自己物語は「複数」で、「それらの中には矛盾や不整合が起こり得る」が、「より時間幅の大きな物語のなかに位置づけられることで解消されることになる」としている。

³⁵ 田中克彦(1999)前掲書、177 頁。

³⁶ 田中克彦(2003)『言語の思想』東京：岩波書店、61 頁。

己の定義を相手に委ねている。「完全な」日本人にも、「本物」の中国人にも、また自分の境遇と似ているが差異を持つ龍舜哉や玲にも、無意識に合わせる衝動を持ち、自己否定を招いてしまう矛盾した感情に陥る。それゆえ、自分の同一性の物語は自分で選択できること（同一性という解釈の枠から脱出することも含む）を示唆する龍舜哉の言葉「おれたちみたいなのは、どっちにもなれるんや（42頁）」などから、その裏の論理を読み取って初めて、同一性強迫や統合仮説からの解放が可能となる。

木村護郎クリストフは、「共生」への視点としての言語権——多言語的公共圏に向けて」において、言語差別の構造について、「国家のお墨付きをえた言語とそうでない言語の話者が出会うとき、言語的に順応しなければならないのは後者」だと述べている³⁷。

こうした反応は、言語差別に対して役立つだけでなく、本質主義的同一性観を信じて疑わない者にも、目からうろこのような世界観となる。例えば、琴子らの不満不平に対する、龍の反応は興味深い。

「ひとはそれぞれやし、それぞれの正しさがある。……自分のほうが正しいと押し付け合って譲り合わなかったら、だれとも親しくなれない。そんなのさみしいやんか」（112頁）

まあ、台湾にも頑固な中国語教師がいないとも限らないけどね」「え？」舜哉は厳めしい表情を作り、「為什麼你的國語這麼像大陸人？〔筆者注：何故あなたの中国語はまるで大陸のひとのようなのだ〕」（134頁）

中国や台湾などの「国籍」帰属意識からも解放されることが可能なのは、「真ん中の子どもたち」にとって、自己肯定につながる、必

³⁷木村護郎クリストフ（2011）「共生」への視点としての言語権——多言語的公共圏に向けて」、植田晃次・山下仁編『新装版「共生」の内実——批判的社会言語学からの問いかけ』東京：三元社、15頁。

要な世界観の持ち方である。外部から固定的な世界観を押し付けられたくない以上、自分からも「それぞれの正しさがある」と思わなければならない。

台湾に親近感を持つ『真ん中の子どもたち』に好意を感じながらも、中国大陸訛りの中国語を操る台湾にルーツを持つ者に対しては、たとえ相手が親族であっても、自分の想像している同一性を投影し、批判しかねない。酒井直樹の言う「血」の繋がりから来る「直接参与の原理」³⁸に依拠するこのような関係性は、上記の考え方（「台湾人の母を持つなら、台湾国語は上手であるべき」）を正当化させ、共有させるのである。

言い換えれば、二項対立的な同一性の捉え方を撤廃し、「完璧な」言語内部の階層構造への編入を拒絶し、支配的言語の権威による貶斥を拒否することにもなる。つまり、支配的言語とその話者の強固化に加担しないことが重要なのである。

5. おわりに

小論は同一性や翻訳理論を参照し、温又柔の創作における自己翻訳の表現や異種混雑言語による言葉の混成や、コトバとしての日本語の多様性を最大限に生かし、異質化戦略をもって、「国語」としての日本語の排他性を批判する葛藤に成功した。その一方、国籍・言語・血統をめぐって起きるダイナミックな「包摂と排除」を描き、本質主義的同一性の幻想から脱出していく作中人物の心境変化をよく表現した。その寛容な心境を多様な「中国語」を平準化した華語語族としての可能性につなげていくことが、また日本語族の可能性を示唆している。

³⁸酒井直樹（1998）「主体とは何か」『現代思想』26 卷 12 号、東京：青土社、84-86 頁。

付記：本稿は、2017年5月26-27日、京都大学で開催された「日本台湾学会第19回学術大会」で口頭発表した内容を加筆、修正をおこなったものである。

参考文献

(日本語、五十音順)

- 秋草俊一郎 (2012) 「自己翻訳者の不可視性——その多様な問題」、『通訳翻訳研究』12号、東京：日本通訳翻訳学会
- 浅野智彦 (2005) は「物語アイデンティティを越えて?」、上野千鶴子編『脱アイデンティティ』、東京：勁草書房
- 麻生博之 (2004) 「自己と差異——アドルノの思考をめぐって」、熊野純彦・吉沢夏子編『差異のエチカ』、京都：ナカニシヤ出版
- 上野千鶴子 (2005) 「序章 脱アイデンティティの理論」、上野千鶴子編『脱アイデンティティ』、東京：勁草書房
- エドワード・W・サイド著、大橋洋一訳 (1998) 『文化と帝国主義1』、東京：みすず書房
- エリック・H・エリクソン著、小此木啓五訳 (1990) 『自我同一性——アイデンティティとライフスタイル』、東京：誠信書房
- 大崎園生 (2005) 「自己の感情体験様式と共感性からみる青年期のアイデンティティについて」、『経営研究』19巻1号、愛知：愛知学泉大学
- 温又柔 (2013) 「日本語圏の「新しい」台湾人として書く」、郭南燕編『バイリンガルな日本語文学——多言語多文化のあいだ』、東京：三元社
- 温又柔 (2015) 『台湾生まれ日本語育ち』、東京：白水社
- 温又柔、リービ英雄 (2016) 「対談『模範郷』を読む：東アジアの時間と「私」」、東京：『世界』887号
- 木村護郎クリストフ (2011) 「「共生」への視点としての言語権——多言語的公共圏に向けて」、植田晃次・山下仁編『新装版「共生」の内実——批判的社会言語学からの問いかけ』、東京：三元社

airiti

- 蔡雨杉（謝惠貞）（2010）「雙重錯位的永恆命題——專訪 SUBARU 文學
賞得主溫又柔」『聯合文學』307 号、台北：聯合文學
- 酒井直樹（1998）「主体とは何か」『現代思想』26 卷 12 号、東京：
青土社
- 酒井直樹（2008）「言語をどのようにして数えるのか——翻訳という
実践系」、佐藤慎司・ドーア根理子編『文化、ことば、教育——
日本語／日本の教育の「標準」を超えて』、東京：明石書店
- 笹沼俊暁（2011）「リービ英雄における台湾」『文学研究論集』29 号、
つくば：筑波大学比較・理論文学会
- ジェレミー・マンデイ著、鳥飼玖美子監訳（2009）『翻訳学入門』、
東京：みすず書房
- 田中克彦（1999）『クレオール語と日本語』、東京：岩波書店
- 田中克彦（2003）『言語の思想』、東京：岩波書店
- 陳培豊著、中川仁訳（2005）「台湾における 2 つの国語「同化」政策」、
原聖編『脱帝国と多言語化社会のゆくえ——アジア・アフリカの
言語問題を考える』、東京：三元社
- ドーア根理子（2008）「第 3 章「通じること」の必要性について——
標準化のイデオロギー再考」、佐藤慎司、ドーア根理子編『文化、
ことば、教育——日本語／日本の教育の「標準」を超えて』、東
京：明石書店
- 安田敏朗（2003）『脱「日本語」への視座』、東京：三元社
- 游仲勳（1995）『華僑・華人経済——日本・アジアにどんな影響を及
ぼすか』、東京：ダイヤモンド社

（中国語）

- 史書美（2013）『視覚與認同：跨太平洋華語語系表述・呈現』台北：
聯經

airiti

(英語)

Skutnabb-Kangas, T. and Phillipson, R. "‘Mother Tongue’: the Theoretical and Sociopolitical Construction of a Concept" in Amon, U. Ed., Status and Function of Language and Language Varieties, New York: Walter de Gruyter, 1989, pp. 450-477.

※2017年8月31日原稿受理 2017年10月13日審査通過